

東京都アルコール健康障害対策推進計画の改定について

- アルコール健康障害の範囲をどの範囲まで取っていくかというのはとても大事です。アルコールの有害作用として、数としては例えば高血圧が一番多いという認識を持っています。
- 受診をされた方、医療機関を受診された方が速やかに自助グループなどにつながるような取組の推進、内科などの医療機関を受診した方が専門医療機関にアクセスしやすくするような取組など記載した方がよいと思います。
- 本人よりも家族をはじめとして、周辺の方が相談にいらっしゃるケースが多いため、地域連携、学校や医療・介護の現場における教育が必要だと思えます。
- 一人暮らしの高齢者の飲酒問題があり、介護職との連携も地域医療において重要です。
- 市民講座を通じてヘルスリテラシーを持ってもらうことや、特定健診、かかりつけ医などを通じて、問題を拾い上げ、多職種連携のもとで、取組を行っていく必要があると思えます。
- 一般医療機関を通じて、パンフレットを渡すなど医療機関の連携を取るのには可能だと思えます。また、女性は男性に比較してアルコールに弱いため、それを缶などに表示できればと思えます。
- 業界において、自主基準により広告を行っていますが、女性の飲酒は課題にあがっていますので、今後も対応していきます。また、小学生等への教育ですが、20歳未満の飲酒のガイドラインの冊子があり、それが有効かと思えます。

○妊娠をはじめ、飲酒が女性のライフイベントに影響を与えるということを情報提供してほしいと思います。また、自助グループにつながりやすくする取組が必要だと思います。

○S B I R T Sについては、都の計画でも明確にしてほしいと思います。また、自助グループでは、オンラインを通じて活動したりしているので、活用してほしいと思います。広告については、お酒の危険性をもう少し知ってもらえるようにできたらと思います。

○社会の変化で一人暮らしの方も増えており、相談につながりにくくなっているので、健診等を機会に依存症に移行することを防止できないかと思います。

○学校教育の中でもアルコール依存症について周知できればと思います。また、女性のアルコール問題についても、教育していければと考えています。

○飲酒の妊婦への影響について、科学的な観点から説明できると良いのではないかと思います。また、遺伝子診断までやらずとも、バッチテストなどにより、臓器障害になりやすいのか、依存症になりやすいのか、遺伝子に基づく科学的対策が可能です。遺伝子、ライフステージ、性別など差があるので、個々人に応じた対策が取れればと考えています。

アルコールは少量でも害がありますが、状況によりハーム・リダクションで健康障害を抑えるということも必要かと思います。